

Title	欧州とラテンアメリカの歴史的な文脈から見た探検家ボンプラン： フランス人陰謀事件とパラグアイ抑留を巡って
Sub Title	El explorador francés Aimé Bonpland en el contexto histórico de Europa y América Latina : En torno al "Cómploit de los franceses" y su detención en Paraguay
Author	前田, 伸人(Maeda, Nobuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要発行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.47 (2016.) ,p.15- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20160331-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

欧州とラテンアメリカの歴史的文脈から見た 探検家ボンプラン

——フランス人陰謀事件とパラグアイ抑留を巡って

前田 伸人

序章：はじめに

1. 問題の所在

本稿は、フランス国ラ・ロシェル出身の植物学者で探検家でもあったエメ・ボンプラン (Aimé Bonpland) の後半生を、欧州並びにラテンアメリカの歴史の流れに照らしながら、とりわけ彼の歩みとその歴史的意味を究明しようと思う。

ボンプランは、ドイツ人の探検家にして地理学者でもあったアレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt) の名と切り離すことが出来ない。二人はフランス革命下のパリで初めて邂逅したのち、二人でスペインに赴いてその政府関係者と接触することで外交的特権を得て、当時まだスペイン領であった中南米地域を五年かけて (1799 から 1804) 旅行した。この探検で自然科学的な調査を実施しただけでなく、人文・社会科学的な探索をも敢行したのだった。独立前夜に当たる時期のラテンアメリカの現状をヨーロッパ世界に明らかにしたのである。

二人は大探検を無事終えた後、その成果を纏めることにした。ただし、ここからは二人の進路が異なっていく。フンボルトは、パリに留まって探検の成果を公刊することに熱情を傾けた。その完成後もおそらくは、科学・文化の中心地に留まりたかったかもしれないが、主要な任務を終えたことで出身国プロイセンに戻り、首都ベルリンで宮仕えしながら 90 才まで生きて、彼の世界観ないし地球観を集大成した畢生の大作である『コスモス』を完成したのだった。

それに対し、ボンブランの後半生は冒険に富んだものであった。ナポレオン一世の帝政期には、皇后ジョゼフィーヌに仕えてその隠棲地マルメゾン（Malmaison）宮殿で植物園長と皇后の顧問とを兼任して活躍した。しかし、ナポレオンの凋落とともに、パリで交遊のあったラテンアメリカの人士を頼りに南アメリカ（ラプラタ地域、現在のアルゼンチン）に渡った。彼は同地で探検を継続する一方、南アメリカの新興独立国を科学の普及と振興で支えようとした。しかし、南アメリカの不穏な情勢に翻弄されて夢を果たせぬまま長き生涯を終えた、と言うのが一般評であろう。

しかし、当然ながら疑問が生ずる。一つは、新大陸の地でボンブランが自然科学的な観点からどんな新たな成果を得ることが出来たのか、ということだ。今一つは、彼が翻弄された歴史的状況が一体どんなものであったのか、換言すると、国際的なレベルから局地的なレベルに至る状況がどう絡み合っただけに彼に影響したのか、ということである。前者に関する言及は多いが、この後者への言及は余り多くない。それ故、この点の解明こそ本稿の目指す課題なのである。

2. 研究史

次に、ボンブランに関する文献・研究書などを一覧しておこう。自然科学者としての側面から見たボンブランの生涯や書簡集は出身地のフランスで出版されている。二十世紀初め、人類学者であるエルネスト・テオドール・アミー（Ernest-Théodore Hamy）が1906年に編集した『エメ・ボンブラン医師、自然誌学者にして南アメリカの探検者』は、ボンブランの簡単な伝記と彼の書簡を収録している。同じくアミーがその前年に公刊した『アレクサンダー・フンボルトのアメリカ書簡集』もそれを補う。更に、アミーの著作を踏まえて2001年に発刊されたのが、ニコラ・オサール（Nicolas Hossard）『エメ・ボンブラン：医師、自然誌学者にして南アメリカの探検者』である。これらの延長上にあるのがフィリップ・フーコー（Philippe Foucault）の小説『蘭をすなどる人』（1990）である。

当然のことながら、ボンブランを十九世紀の歴史的文脈で考察するにはいくつかのレベルを考えなければならない。まずはフランス政府の対ラテンアメリカ外交の実情である。ナポレオン期から復辟期を経て1848年7月革命発生以前までの期間に限定した著作が、ウィリアム・スペンス・ロバートソン（William Spence Robertson）『フランスとラテンアメリカの独立』（1939, 1967）である。次に、関係する南米の歴史を見る必要がある。ブラジル史に就いてはニール・マコーレー（Neill Macaulay）『ドン・ペドロ皇帝：ブラジル

とポルトガルにおける自由を巡る闘争』(1986)が良い。ラプラタとりわけ現在のウルグアイ地域に絶えず進出を繰り返し、その地の不安要因になったブラジル(ポルトガル領あるいは独立した帝国)を知ることが出来る。また、当時の鎖国国家パラグアイの独裁者フランシア博士に関しては、スイス人医師のレンガー(Rengger)、ロンシャン(Longchamp)両人が著した旅行記『ホセ・ガスパール・ロドリゴ・デ・フランシア博士の統治』(1827, 1970)がある。また、独裁者の死去時にトマス・カーライル(Thomas Carlyle)が独裁者を肯定的に論じた『フランシア博士』(1843)というエッセーがある。この著者は日本ではその『英雄崇拜論』で有名だった人物である。また、パラグアイ出身の文学者アウグスト・ロア・バストス(Augusto Roa Bastos)には、出身国のみならずラテンアメリカの宿命とも言える独裁者と言うテーマを、このフランシア博士を扱って描写した小説『我、至高の指導者なり』(1974, 77, 79)がある。エクアドルの神権的独裁者ガルシア・モレノも周囲の大国の圧力を跳ね返した点でフランシアと類似性があるが、彼を論じた小論にピーター・H・スミス(Peter H. Smith)「独裁者のイメージ：ガブリエル・ガルシア・モレノ」(HAHR, XLV, 1965)がある。

さらに、独立期のラプラタ地域は革命の渦中にあった。その一つとしてナポレオン派(ないしボナパルト派)の動向が重要である。“フランス人の陰謀事件”と呼ばれる事件はこの派閥が暗躍したのだった。しかも、これにボンブラン夫妻が関与していた。ボンブランが南米にとって有り難いような有り難くないような扱いをされたのはそうした背景があったからだと察せられる。陰謀事件を扱ったのがエミリオ・オカンポ(Emilio Ocampo)『皇帝の最後の遠征：アメリカにおけるナポレオン帝国』(2009)である。本稿で陰謀渦巻くブエノスアイレスを記述する際、裨益するところが多かったのがこの書である。

3. 本稿の構成

ボンブランの行動をヨーロッパ、ラテンアメリカの歴史的文脈に照らして明らかにする論考は、次のような順序で述べていく。第一章では、彼がボナパルト派になる契機としてナポレオンの皇后ジョゼフィーヌに仕えたことにあることを描く。同時に、ラテンアメリカ人との接触に就いても触れる。第二章では、腰を落ち着けるはずのブエノス・アイレスで生じたフランス人陰謀事件にボンブランがどのように関与したかに就いて記述する。併せて、王政を扶植しようとする欧州諸国の思惑、色々な政治勢力の狙い、地域的な紛争について記述を進めていく。さらに、第三章では、彼がパラグアイで抑留された時の状況

を外国人の探検記などを用いて聊かでも明らかにする。それに加えて、ボンブラン関係者・周辺国によるパラグアイへの嘆願、後世の評価などについても記す。

第一章：パリ・マルメゾン宮のボンブラン

マルメゾン宮はナポレオンの皇妃ジョゼフィーヌが居住した場所である。ジョゼフィーヌは仏領カリブの島嶼マルティニークで生まれた。のちフランスに渡って子爵アレクサンドル・ドゥ・ポアルネに嫁いで二人の子供をもうけた。しかし夫に反革命分子の嫌疑がかけられて処刑され、彼女も投獄された。テルミドールの反動後に釈放されたが、身寄りがなかったので有力者に接近していった。総裁パラスの仲介でナポレオンに接近し、後に彼が皇帝になるとともに彼女も皇后になった。なお、彼女の連れ子はウジェーヌ・ドゥ・ポアルネとオルタンス・ドゥ・ポアルネの兩人である。

ジョゼフィーヌはマルメゾンを居住地としてだけでなく、科学・文芸の保護者を自任していたから植物園の役割を担わせている。植物園の管理掛を列举すると、1803年にシャルル・フランソワ・ブリソ・ドゥ・ミルベル (Charles François Brissot de Mirbel)、1806年にジャン・バティスト・ルイ・ルリユール・ドゥ・ヴィル・シュル・アルス (Jean-Baptiste-Louis Lelieur de Ville-sur-Arce) がほんの僅かの間務め、すぐにエティエンヌ・ヴァントナ (Étienne Ventenat) が継ぎ、この人物の死後1808年8月に植物学者コルヴィザール (Corvisart) の推挙でボンブランが就任したのである¹。

ボンブランはマルメゾンの庭園で二つの職務を進めた。外来の植物を移植して馴化させる職務に従事する一方、前任者ヴァントナの死去で中断していた『ユリ科植物』を完成させ、さらにバラの画家として有名なピエール・ジョゼフ・ルドゥテ (Pierre Joseph Redouté) の協力を得て『マルメゾンにある珍しい植物の記述』を完成させることに力を注いだのである²。

私生活の面でもボンブランは多忙になった。結婚問題がそれである。相手はジョゼフィーヌの侍女アドゥリーヌ・アンヌ・マルグリト・ドゥラエ (Adeline-Anne-Marguerite Delahaye) である。彼女は意志に反して結婚させられるが、夫に我慢できず修道院に逃げ込んで3年間そこで難を逃れ、秘かに娘を産み落とした。成人になってジョゼフィーヌに仕え、離婚の調停に骨を折って貰ったようだ³。そうしたことが、おそらく彼女を強くボナパルト派に魅き付けたのだろう。ともあれ、ボンブランは娘つきの女性と所帯を持ったことになる。しかし、実家からは余り歓迎されなかった。1812年9月にジョゼフィーヌ

ヌがミラノに赴いた期間を利用して故郷に帰るが、宿泊もせずにパリに戻ったとされる⁴。

しかし、ボンプランの身に大きな不幸が襲った。ナポレオンは敗北してエルバ島に流され、最大の庇護者ジョゼフィーヌも 1814 年 5 月 29 日に死去したから、自らの去就を再考しなければならなかった。それが独立したばかりのラテンアメリカ地域への移住だった。かつて新大陸で邂逅した人物やパリで会った人物を頼りにしようとした。例えば、ベネズエラのカラカス出身で“リベルタドル”（南米の解放者の意味）と称されたシモン・ボリーバル（Simón Bolívar）からは、若しカラカスに定住してくれば自分の財産の半分を提供するという申し出があったが、さすがにスペイン王党派の巻き返しがあって内戦が激しかったのでその地には赴けなかった⁵。また、ラプラタ地域の出身者としてベルナルディーノ・リバダビア（Bernardino Rivadavia）にも会っている。この人物はラプラタ連合州の最高指導者であるプエイレドン（Pueyrredón）の外交使節であるが、ボンプランに対し、若しブエノスアイレスにやって来れば、南アメリカ初の植物園を開設し、当局による保護をも与えると約束してくれた⁶。また、ロンドンではコロンビア出身でボリーバルの代理であるフランシスコ・セア（Francisco Zea）にも会っている。

とくにリバダビアの申し出に魅力を感じたのだろうか。彼は結局ブエノスアイレスに向けて出発した。ボンプランは 1816 年 10 月秘かにパリを発って妻と娘と合流した後、ルーアーヴルから船に乗って南米に向かい、翌年 1 月 29 日ブエノスアイレス港に到着したらしい⁷。

第二章：南アメリカのボンプラン

A：独立後の政体問題

1. 総論

ボンプランは、移住先のアルゼンチン・ブエノスアイレスで“フランス人陰謀事件”に関与した。この事件は彼を含め、親ナポレオン派の亡命者たちが画策したナポレオン救出と新大陸における帝国建設計画が露見した事件である。しかし、これは亡命者たちの無謀な計画であったと捉えるだけでは不十分である。少なくとも、ラプラタ地域の政治状況、さらには欧州諸国の対ラテンアメリカ外交姿勢と言ったことが複雑に絡み合った事件なのである。こうした状況をいくらかでも明らかにしてくれるのが、研究書目にも挙げたエミリオ・オカンボの著書であろう。事件の舞台は、ブエノス・アイレスが中心になるが、こ

れに関連して、少なくとも他のアルゼンチン地域（北部）、チリ、そしてウルグアイ、隣の大国ブラジルが顔を覗かせるのである。

ラテンアメリカ独立の狼煙は複数の地域で上がった。南米で言えば、ベネズエラのカラカス、ラプラタ地域（アルゼンチン）のブエノス・アイレスがそれに該当する。この契機になったのが、そもそもナポレオン軍のイベリア半島だった。向かうところ敵無し、のナポレオンには、残る強敵が英国だった。この国を封じ込めるために1806年、ベルリン勅令つまり大陸封鎖令を発令し、欧州諸国と英国との交易を断交せしめて英国を干上らせようとした。しかし、建国以来英国との通商関係が密接であるポルトガルが封鎖令を無視している懸念が払拭できなかったため、ポルトガルを軍事占領した。更に1808年スペインをも占領して、ブルボン家のカルロス四世、それをついだフェルナンド七世の両人を廃し、代わりに兄のジョゼをスペイン王に任じた。フランスの統治を嫌った一派は、南部に逃れてカディスに立て籠もって英国軍の守備を受けながら、臨時政府を結成した。すると、権力の正統性を巡って疑義がスペイン領植民地の間に生じた。新王の命令に服属する地域もあれば、フランスの影響を嫌った臨時政府に従う地域もあれば、そのどちらをも嫌って廃絶された王が復帰するまで現地が政務を代理する地域もあった。そのような混沌とした状況から次第に独立の動きが進んでいくのである。

2. 旧ラプラタ副王領の王政構想

2-1. ラプラタ地域の宗主国からの分離

それでは、争乱の中心となるラプラタ地域に目を移そう。スペイン領の南米は、リマを首府とするペルー副王領の支配下にあった。しかし、英国やポルトガル領ブラジルからの侵攻を阻止すべく、ペルー副王領からラプラタ地域が分離され、新たな副王領に昇格した。それ以前から、ラプラタ副王領の中心地であるブエノス・アイレス市は、従来から英国との密貿易が盛んだった。18世紀初頭のスペイン継承戦争を終結させたユトレヒト条約により、英国は新大陸へのアシエント権、つまり奴隷輸送権を獲得したことで、晴れてラプラタ地域との交易を堂々と実行するようになった。他方で、現地生まれの白人であるクリオーリョ層も従来からの統制貿易を嫌い、欧州諸国との交易を望むようになった。

19世紀初頭、アルゼンチンは英国勢力からの侵攻を二度受けた。一度目はナポレオンがイベリア半島侵攻前の時期に当たる。アフリカ南端にあるオランダ領ケープタウンを占領した勢いを駆って、1806年英国艦隊がブエノスアイレスを占領した。戦わず逃亡した副王ソブレモンテ侯に失望する一方で英国王ジョージ三世に忠誠を誓うことをも嫌った同

地の市民が民兵を組織して対英抗戦を行った。その際、フランス人でスペイン艦隊を管掌するリニエ（Liniers）が副王代理となって民兵を組織し、ついに英国を撤退せしめた。しかし、英国はラプラタ川を挟んで同市の対岸にあるモンテビデオを占領したのち、1807年再度ブエノスアイレスの占領を狙ったものの今回も撃退された。この戦いの結果は二つの成果をもたらした。一つは、英国がラプラタ地域の武力占領を断念したこと。今ひとつは、クリオーリョ（同地生まれの白人層）が自信を抱くとともに、宗主国が強制してきた統制貿易の軛を脱し、1808年11月英国製品の輸入解禁に踏切ったのである。

そのあと、ナポレオンのイベリア半島侵入の報が届くや、ブエノスアイレス市民はフンタつまり臨時評議会（臨時政府）を組織して、ラプラタ副王最後の保守的な副王を追放した。ただし、この機関は必ずしも独立を志向していたものではなく、廃絶されたスペイン国王フェルナンド七世が復位するまでの一時的な代理組織に過ぎなかったが、情勢の変化とともにその性格を変えていくのだった。

2-2. 急進派の擡頭

ナポレオンの欧州制覇が進むとともに、ラプラタ地域でも共和派勢力の伸長が著しくなった。その中心的人物がカルロス・デ・アルベアール（Carlos de Alvear）だった。この人物の動向を記してみよう。生まれはカスティーリャ系貴族で、スペイン滞在時に1809年に創設された“理性的な騎士たち”（Caballeros Racionales）という、ラテンアメリカの独立を目指しナポレオンとの結びつきを強める組織に加入したようだ。カディス居住時、捕虜となっていたフランス人士官の脱出に手を藉して、ラテンアメリカの独立を訴えるナポレオン宛の書簡を託す程にナポレオンに心酔していた⁸。その後1812年ブエノスアイレスに帰還すると、スペインからの独立を目指す革命政府を樹立した。翌年には、国民議会を招集して憲法草案を作成して独立を宣言した。併せて、貴族称号の廃止、児童の奴隷禁止、異端審問所廃止等の様々な改革を手掛けたとされる⁹。

しかし、有力者たちの間ではこのジャコバンの改革に眉を潜めるようになり、急進派の仲間間にすら亀裂が生じてきたと言える。1813年の末頃までにナポレオンがライプツィヒで敗北したという知らせが届くと、独立への熱気が薄れていくとともに、アルベアールと行動を共にしてきたサン・マルティン（San Martín）と溝が生じてきた¹⁰。それが理由かどうかは不明だが、サン・マルティンはペルーに軍事遠征する司令官に任命された。こうしてアルベアールの支配は不動のものになったと思われたが、外部の要因が計算に狂いを生じさせた。一つは、ナポレオンが敗北して1814年までにはイベリア半島での戦争

が終了したことであり、二つ目はそれに伴ってフェルナンド七世が復辟しラテンアメリカの独立を鎮圧する軍隊を派遣して来たことだった¹¹。

事実、対岸のモンテビデオ市にはスペイン軍が駐屯し、ブエノスアイレスを窺った。だが、革命政府は同市を包囲し、開城せしめた¹²。これと同時にナポレオンが皇帝の座を降りたという知らせが届いたのであるが、革命政府の意気は高く、ますます急進的分子がブエノスアイレス市に集合するという情勢が生じた。例えば、チリの革命家ホセ・ミゲル・カレラ（José Miguel Carrera）はブエノス・アイレスに走り、アルベアールの傘下に参じている。ここで興味ある現象が生じている。アルゼンチンとチリの連合がそれぞれ二手に分かれて対立したことである。すなわち、アルゼンチン内部ではアルベアール（急進派）対サン・マルティン（穏健派）の対立、チリの内部ではカレラ（急進派）対オイギンス（穏健派）の対立が起こった¹³。アルベアールの急進化に憂慮したサン・マルティンは、市会（カビルド）のリーダーを務める義父に働きかけて保守的な一派によりアルベアールを弾劾し、ついに1815年4月辞職を余儀させてブラジルのリオ・デ・ジャネイロに亡命させた。こうして、最高指導者がファン・マルティン・デ・プエイレドン（Juan Martín de Pueyrredón）の手に移ったのである¹⁴。こうして、1816年7月9日には北部の都市トゥクマンにて憲法会議が招集され、リオ・デ・ラ・プラタ連合州の独立が宣言されたのである。

2-3. 王政構想

上で見たように、共和主義者の統治は独立を安定させるどころか、むしろ危殆に晒したと言って良い。こんな情勢を前にして、サン・マルティンとプエイレドン両人は、ラプラタ連合州に共和制ではなく、欧州から王を招請して王国を樹立する計画を画ったのである。ただし、この計画も簡単ではなかった。ナポレオン戦争終結後の欧州は、ウィーン体制ないしロシアが音頭を取った“神聖同盟”下にあったことを忘れてはなるまい。いわゆる正統主義は、革命前の状態に復することを意味するのだから、ラテンアメリカ地域は宗主国であるスペインの支配に回帰するという論理になる。これはスペインの論理である。さらに、フランスにもブルボン朝が復活したが、国王自身と閣僚とではスペイン領アメリカに対する姿勢が異なった。国王ルイ18世にとっては、スペインは同じブルボン家であったから、18世紀以来の“家族協定”に拘束されて、スペインの意見にしがちだった。それに対し、閣僚のレベルでは、独立という事態が不可避である以上ラテンアメリカが共和制になる可能性を阻止すべく、ブルボン家に比較的近い人物を王に据えるという考えを懐い

ていた。また、サン・マルティンの影響下にあるラプラタ地域もフランスの恩恵とは異なる人物を推戴せんとしていた。

ラプラタ連合州の最高指導者ブエイレドンの意向を検討してみよう、彼はフランス人の血を引く商家の出身だった。フランス政府の外務大臣リシュリユー（Richelieu）はル・モワース（Le Moynes）をラプラタ地域に密かに派遣して、ブエノスアイレスの意向を探り、同時にヨーロッパ勢力が共和制の樹立に不満な様子を伝えた¹⁵。これに対し、ブエイレドンはオルレアン公フィリップ（1830年の7月革命にフランス国王になった人物で）をラプラタ地域の国王候補として提示した¹⁶。秘密交渉終了後、ブエノスアイレス側も答礼としてホセ・ゴメスを派遣してフランスの外務大臣と会談させ、改めてフィリップを国王候補として推挙した¹⁷。

一方、フランスは、ラテンアメリカの独立がスペインにとっても欧州諸国にとっても危害をもたらさない形で軟着陸する方策を採ろうとした。そのため、段階的にいくつかの案を提起した。最初の策としてスペイン系の王を独立国の王として提起し、それが否認された場合、次善の策としてルイを候補に挙げようとした。この人物がパルマ公国の継承者であり、ブルボン家の傍系の出身でもあったからだ¹⁸。さらに、ゴメスとデソル（Desolle）の会談では、フランス側が国王としてルッカ公（Lucca）を推挙してきたが、プロシア、オーストリア、英国などからも反発が少ないという理由からだった¹⁹。

ここでルイとルッカ公について纏めると以下のようになる。ナポレオン後の世界を決めるウィーン会議により、トスカーナ大公国（1807年ナポレオンは姉妹の一人にこの地を譲渡している）はパルマ公国とルッカ公国とに二分された。パルマ公国は大公妃マリー・ルイーゼ（元ナポレオンの妻に当たる）にその死去まで与えられた一方、ルッカは以前の主権者であるマリア・ルイーザに一旦返還され、続いてその息子に譲渡された。この息子はスペイン王フェルナンド七世の甥に当たる人物である²⁰。

スペインがフランスのスキーム提示に反対したため、結局フランスはブエノスアイレスとの交渉を終えざるを得なかった²¹。このことを知らないまま、ゴメスはラプラタの外務省にデソルの提起した計画を伝え、これを受け取ったランドー外務大臣は、デソルの提起に賛同するよう連合州の国会に要請し、1819年11月12日フランスの提案を賛成多数で受諾した²²。だが、フランス主導の動きに各方面から反発が生じた。アメリカ合衆国、英国さらにはブエイレドンの政敵である急進派が騒ぎ出して、ラプラタに王政を樹立する計画は流産してしまったのである²³。こうして、最高指導者ブエイレドンは失脚し、ホセ・ランドー（José Randeau）がその後を継いだ。同時にこれは連合州全体に大混乱が起こっ

た時期にあたる。

B：フランス人陰謀事件

この節ではボナパルト派の暗躍について述べよう。ナポレオンはいったん退位しエルバ島に流刑されたが、機会を窺ってパリに戻りもう一度皇帝の座に返り咲いた。結局、ワーテルローの戦いでウェリントン将軍に敗北し、今度は大西洋上の文字通り絶海の孤島であるセント・ヘレナ島に流された。これにも拘わらずナポレオン支持派は意気盛んだった。ナポレオンの救出と復位を狙って、その拠点作りに余念がなかったのだ。その拠点の一つが、一つはアメリカ合衆国のフィラデルフィアであり、ここにはナポレオンの兄でかつてスペイン国王でもあったジョゼが亡命してきていた。もうひとつが南米大陸のブエノスアイレスだった。後者の拠点には続々ボナパルト派が上陸し、陰謀を巡らすも露見し、関係者が処刑されることになる。「フランス人の陰謀」と呼ばれる事件である。ボンブランもこれに間接的に関与していた模様だが、その妻アドゥリーヌの方がより積極的に与していたようだ。夫妻にとっては、ナポレオン並びにその妻ジョゼフィーヌの恩顧に報いないわけにはいかなかったからだろう。ナポレオン支持派の人士にはフランス人だけでなく、スペイン人のジョゼ派（スペイン国王ジョゼ・ボナパルト支持派）、ワルシャワ公国復興を夢見るポーランド人など、諸民族が混成した集団であった²⁴。その中には軍人も多く、サン・マルティン軍などラテンアメリカの解放軍に参加した面々も駆けつけている。おまけに、ブエノスアイレスやチリの共和派の指導者（カレラ、アルベアール）なども関与しているのである。

陰謀事件の舞台は1818年から翌年にかけてのブエノスアイレスである。ボナパルト派はボンブラン宅に終結して怪気炎を上げていた。特に、アドゥリーヌは積極的に謀議に加わったので1818年7月、アルゼンチン政府はボンブラン夫妻に警告を発する一方で関係者の一部を逮捕した²⁵。そこで、ボナパルト派は行動を慎重にし、各所に分散することになった。ユング (Jung)、メルシェ (Mercier)、ロベール (Robert)、ラグレス (Lagresse) 等はモンテビデオに向かい、同地に亡命しているアルベアールやカレラと合流して²⁶、ブエノスアイレス侵攻を準備したようだ。また、ポーランドの軍人ブレフスキー (Bulewski) はチリに赴いて同地で解放軍に参加する別の軍人たちと合流し²⁷、さらには蹶起を目論んだようである。

陰謀渦巻く中に、ボナパルト派の中心人物ブレイエル (Brayer) がブエノスアイレス入

りした。彼は、南米を解放するサン・マルティン軍に参加するも、マイブ（Maipú）の戦いで戦場離脱した嫌疑をかけられて“臆病者”という汚名を着せられた上、メンドーサで数ヶ月間投獄されて刑に服した後、陰謀の渦中にやってきたのだ²⁸。時折しも、ブレイエルのかつての同僚であったル・モワヌがやって来た。先述の如く彼は、リシュリユー公の命を受けてナポレオン派の策謀を頓挫させる一方で、現地の革命政府がナポレオン救出に助力することをも妨害しようとした²⁹。ル・モワヌの存在は秘匿にされていたはずだが、ボンブランはこれに気づいていたことは、ロベールに宛てた私信でもそのことが記されていることから窺える³⁰。しかも、ル・モワヌはかつての同僚ブレイエルとも密かに会い、プエレイドンとの会談内容を暴露している程だ³¹。のちにル・モワヌは交渉の成功を本国に伝え、しかもブレイエル将軍に関する評価では、もはやボナパルト派ではないとも述べている。ル・モワヌが嘘をついたのかそれともブレイエルが嘘をついたのかは分からない³²。

ともかくとして、ブレイエルはサン・マルティンの弾劾作戦に出た。作戦の立て方にしろ、有能な人間を周囲から遠ざけるにしろ、有能とはほど遠い凡庸な將軍でしかない、更に自分がマイブーの戦いに参加しなかったという悪評を打ち消し、近いうちにアメリカ合衆国に帰還する、とまで述べた文書を有力者に配布した³³。これに対して、サン・マルティンはブレイエルを逮捕しようとしたものの失敗した。

追っ手を振り切ってモンテビデオに逃亡したブレイエルは、広く『宣言』を發してサン・マルティンを弾劾した³⁴。ブエノスアイレスからはボンブランがイギリス人でボナパルト派でもあるウィルソンに書いている手紙が陰謀の存在を物語る。すなわち、ブエノスアイレスは陰謀を企むサークルが蠢き、カレラなど野心的な連中がモンテビデオに集結し、チリの解放軍に参加してラテンアメリカ解放を進める一方で、サン・マルティンを倒そうと画策している、と報告している³⁵。更に、ウルグアイにいるアルベアール等も、プエレイドンを王政樹立を目論む張本人として弾劾するキャンペーンを張り、チリにおいてもブレフスキーが向かい策動を開始した³⁶。

この中でブエノスアイレスに留まるフランス人は政府の厳しい監視下に置かれた。ラグレスは同市の現状を報告する手紙を送るために、ナポレオン派で理工科学校の卒業生であるパルシャップ（Parchappe）に託し、ボンブランもリオデジャネイロに滞在するル・ブルトン（Le Breton）宛の手紙を同様に彼に託している³⁷。しかし密告があり、当局はパルシャップを拘留したが、肝心の手紙を發見することが出来なかった。更に密告が続き、漸く手紙を發見した³⁸。かくて、チリに向かったフランス人が次々に逮捕（のちに銃殺）さ

れた。ボンブランは事件への関与が疑われたが釈放された。こうして、カレラやアルペールによるアルゼンチン侵攻が阻止されたのだ。

第三章：パラグアイでの抑留

3-1. 内陸へ

ボンブランはフランスを去ってラプラタ連合州に移住してからは、以前パリで知遇を得たりバダビアを当てにするつもりだった³⁹。しかし、ラプラタ政府が内憂外患続きであったからボンブランはなかなか希望を叶えてもらえなかった。1818年7月、ラプラタ連合州の自然誌教授に任命されたが、名目上の任命同然であったから、フランスにあるような植物園の建設を請け負って貰えなかったし、授業を行ったり収集品を展示する場所すら提供を受けられなかった⁴⁰。妻アドゥリーヌの舌禍が災いし、政府の大臣タグレ (Tagle) からは政府からの援助を当てにすべからずと申し渡され、ボンブランは収入源が年金と医療活動の二つのみに限られてしまった⁴¹。また、1819年には前章で述べたように、国家転覆の嫌疑がかけられている。

ともあれ、自らでブエノスアイレス市郊外にキンタ・デ・サウレス (Quinta de Saules) なる地所を手に入れたが、荒れ放題でベツレヘム修道会所有の土地だったらしい⁴²。ただし、借地料の件などでもめることが多かったようだ⁴³。その中でかれの関心をとりわけ魅いたのがお茶に供されるマテであった。その野生種を求めて内陸に入り、川中島であるマルティン・ガルシア島で発見している⁴⁴。ここから彼のマテ栽培が始まるのであるが、フランシア軍の捕虜になるのである。

3-2. パラグアイへ

パラグアイはブエノスアイレスの支配を嫌って独自の道を歩んで独立を果たしている。その立役者がフランシア博士 (Dr. Francia) である。フランシアの政策は徹底的な鎖国政策の実施だった。同国を流れるパラナ河の河口をブエノスアイレスが掌握していたので、パラグアイの命運が外国の手に左右されるのを嫌った結果だった。況んや、自由貿易が行われて、海外から安価な製品が入ってくれば国内の産業は壊滅するという懸念も大いにあったからである。しかも、パラグアイの周辺がラプラタ連合州の不安定な政治状況にあって、地方ボスであるカウディーリョが乱立して勢力争いを演じ、その影響が内陸にまで及びかねなかった。ボンブランとの関連で言うと、パラナ河やウルグアイ河が並走する地域

であるコリエンテス州やエントレリオス州が戦乱状態に陥るのである。よって、パラグアイとしては戦火や経済的脅威を断つために、国境にスパイ、外国商人、軍人など不審な人物が近づけばこれを逮捕、抑留したのだった。こうした状況下でパラグアイに近づいたボンブランが逮捕され、十年近く同国に抑留（1821-31）されたのだ。

ボンブランが抑留されると、様々な外交チャンネルを通じて彼の釈放が検討された。彼の妻アドゥリーヌはブラジルまで赴いて1824年、ペドロ皇帝に直訴している。それは1824年のことであった。その経緯を記しておこう。ポルトガルから独立したブラジル帝国は初代皇帝がドン・ペドロ（Dom Pedro）であった。ドイツ系のレオポルト皇妃と離婚し、ブラジル生まれのドミティラと結婚して第一子を生む二日前にボンブランの妻が皇帝に謁見をした。皇帝は、北東部ベルナンブーコの反乱に手を焼いていたのでパラグアイと争って戦線が拡大することを恐れていたため、アドゥリーヌの頼みには同意を与えることが出来ず、スペイン人と言っても良い彼女の美しさをむしろ満喫していたようだ⁴⁵。埒があかないことに立腹したのだろうか、皇帝が漏らした言をブラジルに来ていた英国の海軍提督コクレーン（Cochrane）に話した。すなわち、6月24日ニテロイ港で実施される観艦式の際、コクレーンが船を離れている間、ブラジル官憲が旗艦ドン・ペドロ号を捜索し、秘匿されているとされる資金を差し押さえようとした、というものだ。憤激したコクレーンは皇帝の寝室にまで赴いて抗議を行ったので、臨検は立ち消えになったという⁴⁶。

アドゥリーヌは後日、マリア・グラハム（カルコット女史）に対し、大臣たちがコクレーン卿の殺害を謀っていたが、自分がその殺害を食い止めたと言ったとも伝えられる⁴⁷。

ボンブランよりもあとにパラグアイに抑留された人物に、スイス人医師のレンガー（Rengger）、ロンシャン（Longchamp）がいる。彼は欧州に帰国してから彼らが経験した旅行記・抑留記を刊行している。その記録は『ホセ・ガスパール・ロドリゴ・デ・フランシアの統治について』と題され、1819年から25年にかけての六年間を記録した作品である。本来はフランス語で出され、英訳は1827年に出ている。本書は二部に分かれており、前半の第一部がパラグアイの独立から二人が出国するまでの歴史が描写され、後半の第二部が同国の政治・経済・社会について記されている。前書きを読むと、欧州ではフランシアに関して三つの類型があると述べている。一つは、周辺諸国の争乱を尻目に、人々に文明を扶植する哲学者というイメージである。二つには、自分の国を荒廃にすることで尊大に振る舞おうとする篡奪者と見るものだ。三つ目は保守的の見解の持ち主にあるのだが、彼の中にかつて追放されたイエズス会の代理人の姿を見る、といったタイプがある⁴⁸。何れも現状を反映していないから、自分たちの経験でフランシア個人・その国家の多面性を

提示しようとしている。パラグアイは可能性に満ちているから、現状で判断するのではなく将来で判断すべきであり、周囲の諸国は功罪を含めてパラグアイの歩みを見るべきとも説いている⁴⁹。

二人はブエノスアイレス上陸後、内陸地方に入った。コリエンテス州に入った時、暫くの間留め置かれた。これはウルグアイのカウディーリョであるアルティガス (Artigas) が先住民兵を率いて同地を蹂躪したためだ⁵⁰。この事実を示すことでパラグアイの平穏さを対照させている。ついにパラグアイのアスンシオンに達し、二人はフランス博士に謁見している⁵¹。しかし、諸般の事情で留め置かれ、出国が許可されるのは数年後となる。この書には、抑留中のボンブランに会見した記述もある。領内に入ってマテ (マテ茶の葉) の栽培を試みていた最中にパラグアイ軍に捕えられたボンブランには鎖が付けられた。暫くしてフランスがこのことを知り、鎖を外して地方の家屋に軟禁した⁵²。フランスは二人のスイス人に対してボンブランを捕らえたのも彼が領内でマテを栽培したからではなく、ラプラタ連合州のカウディーリョの手紙を持っていたからだ、と述べている⁵³。さらにまた、ルッカ公を南米地域の国王にしようとした姿勢の故にフランス人に対する不信感もそれに輪をかけているようだ⁵⁴。

トマス・カーライルは、独裁者フランス博士の死去時にそのエッセイを書いている。旧スペイン領アメリカの急進的政治が結局、無秩序と混乱をもたらしたに過ぎないことを述べ⁵⁵、フランスの厳格な政治がむしろ平和と秩序をもたらしたことを大いに評価している。ただ、ボンブランの抑留に関しては、やり過ぎであったと述べている⁵⁶。

最後に：まとめに代えて

ボンブランの後半生は冒険に満ちたものである。だが、それは彼の持ち前の気性の故ではなく、歴史的状況に翻弄された面が大きい。とりわけ、フランス人の陰謀事件の発生は、捲土重来を期したボナパルト派の暗躍だけが理由ではない。スペインから離れた南アメリカ諸地域の帰趨を巡る欧州の列強の思惑が交錯したことも大きな理由である。彼はまた、内陸に入ってパラグアイでは十年に渡り抑留された。それも単なる独裁者の故ではなく、同国の地政学的位置を大いに考慮に入れなければならない。パラグアイの運命は下流を掌握しているアルゼンチンの意向次第であるから、その影響を少なくしなければならない。河川を利用できるコリエンテス州、エントレリオス州は内陸州とはいえ、海洋へ通じていたので、周辺諸国の争奪の場となったのである。本稿では、フランス人陰謀事件ならびに

バラグアイ抑留が終わるまでのボンブランと彼をめぐる歴史的状況との関係が少しでも明らかになった。今度はバラグアイ抑留終了から死去までの時代を歴史的状況と絡めて論ずることになろう。

註

- 1 Nicolas Hossard, *Aimé Bonpland (1773–1858), médecin, naturaliste, explorateur en Amérique du Sud* (L'Harmattan, 2001), p. 35.
- 2 *Ibid.*, p. 36.
- 3 *Ibid.*, p. 40. n. 84.
- 4 *Ibid.*, p. 40
- 5 *Ibid.*, pp. 42–43.
- 6 *Ibid.*, pp. 46.
- 7 *Ibid.*, pp. 49–50.
- 8 Emilio Ocampo, *The Emperor's Last Campaign* (Univ. of Alabama Pr., 2009), p. 31.
- 9 *Ibid.*, p. 32.
- 10 *Ibid.*, p. 33.
- 11 *Ibid.*, p. 33.
- 12 *Ibid.*, p. 34.
- 13 *Ibid.*, p. 35.
- 14 *Ibid.*, p. 35.
- 15 William Spence Robertson, *France and Latin-American Independence* (Octagon Books, 1967 (rep.of 1939)), p. 161.
- 16 *Ibid.*, p. 161.
- 17 *Ibid.*, p. 164.
- 18 *Ibid.*, p. 165.
- 19 *Ibid.*, p. 168.
- 20 Ocampo, *Op. cit.*, p. 313.
- 21 Robertson, *Op.cit.*, p. 175.
- 22 *Ibid.*, p. 172.
- 23 *Ibid.*, pp. 174–175.
- 24 *Ibid.*, p. 130.
- 25 *Ibid.*, p. 278.
- 26 *Ibid.*, p. 278.
- 27 *Ibid.*, p. 278.
- 28 *Ibid.*, pp. 279–280.
- 29 *Ibid.*, p. 280.
- 30 *Ibid.*, p. 281.
- 31 *Ibid.*, p. 281.

- 32 *Ibid.*, p. 282.
- 33 *Ibid.*, p. 281.
- 34 *Ibid.*, p. 282.
- 35 *Ibid.*, p. 283.
- 36 *Ibid.*, pp. 283–284.
- 37 *Ibid.*, p. 284.
- 38 *Ibid.*, p. 285.
- 39 Hossard, *Op. cit.*, p. 53.
- 40 *Ibid.*, p. 54.
- 41 *Ibid.*, p. 56.
- 42 *Ibid.*, p. 54.
- 43 *Ibid.*, p. 53.
- 44 *Ibid.*, p. 58.
- 45 Neill Macauley, *Dom Pedro: The Struggle for Liberty in Brazil and Portugal* (Duke Univ. Pr., 1986), pp. 170–171.
- 46 *Ibid.*, p. 171.
- 47 *Ibid.*, p. 327. n. 8
- 48 Rengger and Longchamp, *The Reign of Doctor Joseph Gaspard Roderick de Francia* (Thomas Hurst, 1970 (rep. of 1827)), pp. v–vi.
- 49 *Ibid.*, pp. vii–viii.
- 50 *Ibid.*, pp. 28–36.
- 51 *Ibid.*, pp. 37–45.
- 52 *Ibid.*, p. 81.
- 53 *Ibid.*, pp. 80–81.
- 54 *Ibid.*, p. 83.
- 55 Thomas Carlyle, “Dr. Francia (1843)” contained in *Critical Essay and Miscellaneous Essays* (Chapman and Hall, 1869), pp. 69–80.
- 56 *Ibid.*, pp. 134–134.